

時の足音

坂西志保

時の足音

雷鳥社版

時 の 足 音

著者略歴

東京都に生まる。
北米ホイートン大学、ミシガン大学大学院に学び、
1929 年、哲学博士号を授与さる。ヴァージニア州ホ
リンズ大学で助教授をつとめ、のち合衆国立図書
館の東洋部に勤め、日本部長となる。第二次大戦に
より、交換船にて帰国。終戦後、参議院外務専門員
をつとめ、現在、国家公安委員。

(主著)『支那古代風景画論』『支那古代美術論』
(ロンドン刊行)、『現代詩歌集』3巻、『狂言の研
究』など(ボストン刊行)、『地の塩』『生活の知
恵』『生きて学ぶ』(雷鳥社)、『続生きて学ぶ』(同)
など。

昭和四十五年三月三十日 第一刷発行

定価 六〇〇円

〒 七〇円

著者 坂西志保

発行者 里田旬

印刷者 横山弘

発行所 雷鳥社

東京都千代田区九段南二丁目一八
千代田会館内
郵便番号 一〇二
電話(二六)四八五九番
振替東京九七〇八六番

印刷 横山印刷株式会社

製本 清水製本所

軽丁・風丁がありません。
かえいたします。

時の足音 目次

I

人老い易く	6
衣食足りて礼節を知る	9
「豊かな社会」の副産物	13
友情―求めることのない愛	17
衣がえ	23
心の大そうじ	26
恋文	29
――東は東・西は西――	
四十代初期の老化現象	32
忘れ物	35
一億総発言時代きたる	38
憲法と人命尊重	41
――意識と行為に大幅な隔たり――	

郵便番号簿について

45

女は強くなったか

43

女性も職場へ

——回顧と展望——

51

広い視野に立って生きる

64

生かして捨てる

63

薬を粗末にするな

72

部屋に個性と若さを

75

真の国際人——大拙先生

81

Ⅱ

柔軟な頭脳を

88

子どもの暴力

91

家庭は“しつけ”の道場

95

蒸発した子ども

98

大人と子どもの世界

——大学生という怪物——

99

学生騒動の茶番劇

105

甘ったれるな東大生

108

教育はなんのため

111

自分の足で

114

エームス先生

——ほんとうの教育者はと問われて——

117

■

日本人という人種

122

“対話”は幻想か

——七〇年安保へ両陣営の対立をめぐって——

129

対話の限界

134

訓練の年

138

日本への三つの警告

141

悲しい世代の断層

145

日本の進むべき道

——ライシャワー夫妻来日に思う——

149

中庸ということば

——アイクの遺言に思う——

153

勇気で樂觀的

——アメリカ人という人種——

君主制と王位

163 157

IV

民主主義二十余年（講演）

岐路にたつ日本（講演）

広報と対外関係（講演）

219 194 168

V

自己満足

——学ぶということの尊さと深さ——

心の友英詩集

学園の思い出

車と私

原始的な健康法

あとがき

270 266 261 258 255 252

I

人老い易く

また「敬老の日」がくる。年とつてひがむ訳ではないが、年一回一日だけ上座（かみざ）に据えられてちやほやされ、あとの三百六十四日は邪魔者扱いにされるのではかなわない。もともと何々日とか何々週間というのは、特定の時間を限って、重要な問題を大衆に知ってもらい、それを残りの一カ年、続けてもらうという趣旨なのである。防火週間だけ火の用心し、あとの五十一週は燃えるにまかせておくということではない。敬老の精神は、一日だけでなく、終生、教養ある人の持つべき心構えの一つである。というのは、若い人も早晚老人の部類にはいるので、今日は人の身、明日は自分の身なのだからである。

聖書に「白髪は栄（さかえ）の冠なり」とある。年齢を増すにつれ、頭脳はさえ、経験によって修養を積み、人格的に完成の域に達したという、いわゆる老人の理想像は白髪によって象徴されている。

ところが、東洋には「馬齢（ばれい）を重ねる」という言葉がある。なぜ「馬」を引っ張り出

してきたのか、広辞苑などを見たが「自分の年齢の謙称」と説明してあるだけ。だが、私たちはすぐ「馬齢を重ねた人」をたくさん思い出す。“このごろの若い者は”というせりふではじまり昔はよかったということで終わる。彼らは一様に過去をほめ、美化し、現在をののしり、若い人たちをこきおろす。自分の身体の衰え、考え方に幅を失ったことなどを、若い世代の冷酷さや世間のせいに行っている。このような老人は、波の荒い日、小舟に乗っているようなもので、山も空も、大地までも、自分といっしょに揺れているように考えているのである。

人間はとかく自己本位に物事を考えがちである。特に、民主主義の思想がはいつてきてからは、自主性を重んじ、自分を大切にするよう仕込まれた。その行き過ぎが、なんでも自分とともに引きずって行けると思ひ込むことである。老いぼれとまでいなくなっても、時代のずれが目立つ人が「乃公（だいこう）出でずんば」なんて顔をすると、困ったなあと思う。昔から「榮枯盛衰」といつているではないか。時代は変わり、前進している。私たちは一定の年齢に達する時、精神も肉体も色あせ、衰える。それを卒直に認めるのが知性なのである。私たちは自分の死を一大事のように考えがちであるが、自分が死んでも生きてても、他人にはなんのかかわりもない、と考えるべきで、それが悟りというものなのであろう。

こう書いてくると、現在の高齢者と若い人たちの対立やいがみ合いの悪者は前者で、後者はその被害者だ、という印象を与えるかも知れない。しかし、自然の法則は間もなく、今日の若い

人たかを悪者というか、加害者の地位につけてしまふであらう。人生のゲームは永遠に続くのであつて、選手交替は自然の理である。老いた選手は自ら進んで榮譽の場を若い人にゆずり、しかも、命のつづく限り自分の経験から生まれた尊いものを伝え、愛情をもつて見守る。若い選手もそれを正しく喜んで受ける心の幅を育てることなのである。それが分別というものである。ギリシアの賢者は、

「分別してほどよい時に、お前の老いた馬を捨てなさい、あえぎ倒れて、人の物笑いとなることを欲しないならば」

といつてゐる。

しかし、そのためには、若い人たちが、年とつて身心ともに衰え、退化した人たちに捨てる時と場、それに勇気を与えなければならぬ。それは相手を敬う心と、捨てた後にくる空白を十分につぐなう愛情が必要なのである。この敬愛の精神は常時あふれ出る泉であつて、九月十五日だけに噴き出す間歇（かんけつ）温泉であつてはならない。こういうことを功利的に考えるべきではないが、紅顔の美男美女も、やがてしわのよつた翁（おきな）・媼（おうな）となるという運命にあるのを忘れてはならない。

衣食足りて礼節を知る

「衣食足りて礼節を知る」という言葉は、中国の古典から来たもので、生活が豊かになると、道徳が高まって、名誉と恥を知るようになる、という意味である。たしかに人間にはそういう面がある。

終戦直後、全日本が飢餓状態に陥った際、数人の子供をかかえた母親が、芋畑に盗みにはいり、お百姓になぐり殺された。アメリカ軍が兵隊に支給するカーキ色の毛織の暖かいシャツを着た青年が、有楽町駅でアメリカの憲兵になぐられ、引きずられていくのを見た。街では幼い子どもたちがアメリカ兵を見ると、「チョコレート、チョコレート」といって手を差し出し、あとを追った。悲しく恥ずかしいと思っても、子どもに与える甘いものはなにもなかった。

敗戦、降伏、占領という悪条件が重なって、生きのびるためには、盗みも物乞いも仕方がないというところまで追いつめられていたのである。

ところが近年、物質的には恵まれ、住は別として、衣と食には事欠かなくなった。それ

では東洋の君子国で、礼節を知るといわれる日本人は、共同の社会に住し、望ましい行動をするようになったであろうか。実は、その反対で、公德心の欠如がなげかれている。街は紙くず、あきかん、あきびんで、見るかげもなく、大通りに植えた美しい草花は引き抜かれたり、花やつぼみもぎ取られてしまう。

中流家庭の主婦が高級呉服品や装具品を大量に万引する。高校生の集団万引がある。盗んだ品物を仲間同士で売買したり、交換して、遊ぶための金に当てている。主婦も高校生もスリルのためにやるのだといっている。

一般大衆が道義心に欠けているのははっきりと出て来たのは、東名高速道路が開通してからである。ここは山谷や釜崎などと違って、自動車で走る人たちなのであるから、生活に余裕のある階層と見てよいであろう。快適な超近代的なハイウエーで、両側の自然は美しく、都会の汚染された空気から脱出し、胸をふくらませていることだろうと思っていると、レース場と考えているのか、制限速度を越え、死物狂いで他の車をぬいて行く。

そして、窓からなんでも手当たり次第にほうり投げる。整備されたハイウエーの両側は、見るうちにごみだめ化するのである。もっと悪いことは、開通して間もなく、サービス・エリアの備品がみんななくなってしまった。鏡はもちろん、電球までかっぱらって行く。

しかし、これは東名高速道路だけのことではない。新幹線が開通してから数カ月間、特権階級

の乗物と見なされていた間は、客の行動はモデルになるほどよく、車内は清潔であった。ところが、大衆化した途端、不潔で、ごみごみし、鈍行列車とそう変わらなくなった。乗客の人種が変わったのかと思うほどであるが、みんな同じ日本人なのである。

礼儀正しいといわれる日本人が社会生活となると最低の点しかつけられないということについては、これまでいろいろの角度から論じられてきた。家長、上司、権力者である官吏や役人には礼を尽くすが、他人は問題外である。タテのつながりはあるが、横にはなんの連絡もない。

理由は、幼い頃から共存の社会に生きる技術をたたき込まれていないからである。もちつもたれつの世の中である。社会で好ましい、愛される人物となる訓練を与えられる。その第一歩は、他の人の存在を認め、自分にとって不愉快なことは慎しみ、してもらってうれしいことを、広く他人にしてあげる。戸をあけて自分がいいたら、だれか後に来る人のために戸をおさえて待つ。公共の洗面所を使った後はきれいにし、次の人が気持ちよく使用できるようにしておく。とかく自分本位に考え、行動したがる人間を、礼節を心得た社会人に仕立てるためには、家庭で正しい生活の型を身につけなければならない。

逝かれる直前に『礼儀作法の常識』という本を書かれたルーズヴェルト夫人は、エチケットの根本は他人に対する思いやりであり、自分と同じように他の人々も実在しているのを認めることだといっている。この思いやりが、自分のすることが他の人に与える影響を、理屈ではなく、

実感として身につける大きな役割を果たすのではなからうか。現在の日本人の多くはアメリカ人のいう「金持だが、道義心ということになると貧乏人級」なのである。言いかえるなら、文化社会に生きるのを許されない人たちということになる。

ではどうしたらよいか。高速道路にパトロールをおき、ゴミを捨てる車に重い罰金を課する。街路に煙草の吸がらや紙片をなげる人、施設を破壊する悪者をきびしく取り締まる。まったく不経済な、非生産的な仕事であるが、軽犯罪法を適用して、痛い目にあわせないと、日本人の公徳心はいつまでたっても治らないであらう。

「豊かな社会」の副産物

明治の末期から大正、昭和の初期にかけて就職難のにがい経験をして来た私たちにとって、現在の若い人たちは職の選り好みができて、うらやましい。アメリカの労働省の調査によると今日、二万一千七百四十一の職業があるというが、日本だってほぼ同数あるのではなからうか。しかも、職場は労働力の不足をかこち、最高の条件で雇い入れようとしている。高給を払うといえど、金は持っているからいらん。特技を身につけることができるかと誘いかけると、大学で必要ないだけ仕込まれてきたから、もうたくさん。社会的地位？ さあ、どうかなあ、と首をかしげ、提供される社会に属したいかどうか、まだわからんという。

もちろん今日の大学生がみんなこのように考えているとは思わないが、ここで人生の一コマを終わって次の段階に歩み入るといふ意識をもっていないことはたしかである。一生自分の運命をかける職をみつければ、それに終始するなど、終身刑のようなものであほらしい。愛と情熱をそそぎ込めない仕事など、強制労働で、一日もがまんでできない。正規の教育が終わったからといって、

目の色変えて就職することはないであろう。であるから週刊誌『タイム』によると、数年前は卒業をひかえた学生の三〇％はなにをしたいかまだ決めていないということであったが、今年は五四％が未定だという。ある学生など、三十になってまだ生きていて、牢屋にたたき込まれていないなら、その時になってきめればよい、といっている。ところが、決意して就職したとしても、そこに長くとどまるつもりはない。現状から判断すると、大学出の若者たちの半数は、最初の五年間に少なくとも一回は職を変えるであろう、といわれている。職場の移動はそれだけ激しくなっている。

ではどうしてこんなことになったか。『フォーチューン』誌は、今日の大学生は個人主義に愛想をつかし、また古い世代のでっちあげた社会機構に大きな不信を抱き、頼りになるのは自分たちがこれから創造しようとしている新しい「コミュニティ」だ、と考えているという。既成の社会に大きな野心を抱いてよじ登ろうとしたって、たいしたことはない。おやじを追い越して出世したって、なんということはないし、最高の侮辱は彼らをまったく無視することである。伝統、社会のきまり、過去の人たちの期待などから解放され、一つの運動から他へ、イデオロギーからイデオロギーへと転々として漂流を続けているうちに、運がよければいつか自己発見に到達するかも知れない。その間飲めよ歌えよで、明日死ぬかも知れないんだから、とにかくカッコよく生きることだと考えている。